

コラム

「きのうきょう」

# 拝啓 小澤先生

学生記者 渡邊大裕（総合政策学部3年）

ご無沙汰しています。もう大学3年生になってしまいました。あれから4年も経つのですね。

中央大学の総合政策学部政策科学科プロフェッショナルコースというカッコいい名前の所に通っています。多摩キャンパスの広大な自然の中を歩くと、綺麗な花壇の横には、池がありコイが泳いでいます。何といても最近リニューアルされた大きな学食棟「ヒルトップ」が有名です。

今はアルバイトをしたり、就職に向けて勉強したり、それなりに忙しく、充実した生活です。アルバイトは塾講師。あのころ先生から言われたことを今では生徒に偉そうに話す日もあります。

先生に出会えたことで、人に教えることのできる喜びや素晴らしさを知りました。いろいろな生徒と接する中で、今なら少し、あのときの僕に対する先生の気持ち分かるような気がします。



中央大学多摩キャンパス

自分がしたことで先生をどれだけ悲しませたのだろう。最近、ふとしたことからさまざまなことを思い出します。中学、高校で先生には3年間もお世話になりました。

ずっと謝りたいと思っていたことがあります。凄く可愛がっていただきましたのに、先生を裏切る形で高校を去ってしまったこと。

もう2度とくぐることはない、そう決心して後にしたあの日の正門。

大学入学前に再び先生に会いに行きましたね。5年間毎日通った通学路。見慣れていたはずの道や校舎が懐かしく、どこか寂しさを感じながら歩きました。

「かはい切ってあげられなくてごめん」と涙を流した小澤先生の言葉は、今でも僕にとっての最大の応援歌です。

高校を去る日、姿が見えなくなるまで昇降口で見送っていただいたあなたの姿がいつも心の中にいて、挫けそうになったときにそっと、「これでいいのか?」と問いか

けてきます。その思いがいつも僕を奮い立たせてくれました。

「違いを認めて、ともに生きる」というクラス訓はまだ教室の黒板の上に貼ってありますか? この言葉は今も僕の心の中の軸になっています。

ことはとても暑い夏でした。先生は肌を焼きたくないからと夏でも長袖を着ていました。とても色白だったのを覚えています。一方で万年筆にも詳しくて、昔のあだ名が「教授」だった小澤先生。今もお変わり、ありませんか?

3年前の、僕が居ない卒業式の日。僕がそこにいるつもりで、僕が使っていた机を教室にそっと置いてくれた

のですね。卒業式には抱え

きれないほどの花束を、本当は先生に渡したかった。みんなと一緒に、あの高校の友達と卒業式に出なかった。

たくさんの困難や試練を乗り越え、今ようやく全てを受け入れ、前に向かって歩いています。人は間違えを犯したり、もうやっ

られないと投げやりになったりすることもあります。

そんなとき、ふと浮かんでくる大切な人たちの顔、言葉。誰の心の中にも、ときには勇気付け、ときには正しい方向へ進む力となる、そんな存在がいるだろう。いつか先生のように、誰かにとって強い支えになれるような自分になりたい。

先生、僕は今、公務員試験に向けて勉強しています。目標に向けてしっかり頑張っていますよ。この夢、必ず、叶えて見せます。少し成長した僕を見て先生は、何ていうのでしょうか。

再来年の春、大学を卒業したら会いに行きます。千葉・海浜幕張駅を降りてまっすぐ歩いた大通りにかかった歩道橋。

桜が咲く一本道を通して。

敬具